



連載 I
当財団専門委員
私の研究と観光
第 2 回

「旅行の楽しさ」の研究

立教大学観光学部教授

立教新座中学校・高等学校校長

村上 和夫

「観光をすることから私たちはどのように楽しさを創り出しているのだろうか。」私の最近の研究は旅行を楽しむことから究明することである。

観光は「楽しむための旅行」と定義されるが、この定義はふたつの側面を含んでいる。

第一は、道中が楽しい旅行とする側面であり、第二は、旅の経験を基礎に私たちはさらに生活の楽しさを創り出す資源とする側面である。

マスツーリズムにおける観光研究

今から40数年前、私が学生のころ、「旅の楽しさは個人的経験であるので科学的に研究し社会現象として究明されねばならない」と教わった。そこでは、旅の楽しさは観光行動を生起させる独立変数として、また観光への期待の充足度が満足と結びつくとされていた。

確かに、マスツーリズムにおいて量としての観光、すなわち観光需要を理解しようとするならば、前者の発想は有効なものであり、この理解は否定できない。現在でも観光を産業を通じて

理解しようとする英語圏の観光研究には、この理解が強く見られる。

観光経験を基礎にした楽しみとは

しかしながら、少し身を引いて考えてみると事態は違って見えてくる。

社会のほとんどの人が、毎年数回観光をするような社会を想像してみよう。ここでは、旅の楽しさは「道中の楽しさ」としてばかり語られるのではない。そのような社会では、多くの人が観光経験を持っており、観光の楽しさ（道中の楽しさ）が社会的経験として蓄積され、実際に旅行を伴わない空想の旅行語にも人々は「面白さ」を感じるようになっていくはずである。

実は、このような現象は決して新しいことではない。すでに19世紀の半ばに近代の始まった欧州では、『八十日間世界一周』（ジュール・ヴェルヌ、1872年）が新聞小説として発表され、多くの人々がそれを読み楽しんでいった。そのころすでに、筆者も読者も共に観光という旅行経

験を知る社会に住んでいたことがそれを可能としたのではないだろうか。

このような旅行小説では、観光から旅の「楽しさ」が切り出され、空想の旅行語が紡がれ、斬新な旅の楽しさが創造されるのである。『八十日間世界一周』では主人公と彼の執事が恰も旅行者と旅行者を連想させ、両者の関係がコメディタッチで描かれ、日付変更線の通過に主人公が気づいていないことが、結末の面白さをもたらしている。これは近代観光の要素を社会が熟知していなければ楽しむことができないものである。

実際に旅行しないで、楽しむこと

観光が「楽しむための旅行」であるならば、論理的には「旅の楽しみ」を十分に知った社会において、もはや事実としての旅行が無くても旅の楽しみを資源として社会生活を豊かにする方法に人々は関心を向けるのではないかと考えることができよう。

今、日本では、観光参加率は横ばいか海外旅行に至っては若者の参加率は漸減とさえ言われており、他方で、テレビのプライムタイムには旅行を扱った多くの番組が放映されて、旅行の楽しさのエピソードは、もはや実際の観光地を紹介する旅行素材の説明に利用されるのではなく、「笑」の世界(楽しみを創り出すエンタテイメント)

を創造する素材として機能しているのである。もちろん、そこには娯楽産業やメディアあるいは出版産業の発展があり、「旅の楽しさ」は産業と無縁ではないのだが、それを観光研究でほとんど意識しないのは不思議なことである。

道中の失敗から生まれる、

新たな楽しさの発見

旅行経験を生活を楽しむための資源として利用する社会とは、先述した「旅の楽しさは個人的経験」として我々が追い求めてきた豊かさにはならない。未だに「道中の楽しさと観光需要旅行需要」の再生産」にのみ研究を傾注する意味は何なのか、それは必要と思うが少し寂しさを感じざるを得ない。

旅行経験から楽しさを創り出す行動を知るために、一般に「楽しみのための旅行」という定義と矛盾する行為が見られることを紹介しよう。事例として「旅行の楽しかった経験を語る」という時に旅行の失敗譚が少なからず含まれるという事実をあげることにした。

生活習慣の違い、体調の不具合、犯罪の被害、予期せぬ無駄遣いなど旅行中の失敗は幅広いが、その多くは観光ビジネスにおいて、避ける努力が傾けられてきた事柄である。失敗譚に含まれる「失敗→楽しさ」の構図は必ず「新しい発見」があり、発見は「笑」や「哀愁」を生む修辭法

をベースに表現され、さらに聞き手に「受容」される時に、失敗譚が娯楽譚（楽しい旅物語）へと転換していくのである。

道中を快適にそして安全なものとしようとするビジネスの努力と、失敗譚を娯楽譚に変換して楽しむ人々の行為とは、明らかに矛盾する。しかし、ここに豊かな時代の観光を考える重要なポイントが存在する。

「旅行の楽しさ」の本質を探る

「道中の失敗」は、旅の楽しさを創造するために価値のあるものであっても、それを目指すことはできない。それ故、観光ビジネスが避けようとする「旅行者の失敗」すなわち積極的に創り出される「旅行の安全策」は、実は「失敗」の事実の後続するものとなるのである。

ところが、「失敗」は、予期が不可能であると同時に、それが生起した時点では個々ばらばらであり、それ故に今度は「旅行の安全」の概念は個々の「失敗」から乖離してしまうのである。そして「旅行の安全」の概念とそのため的手法が完全性を目指そうとしても、それが叶わないのであれば、それを創り出す努力は無駄とは言わないが「旅の楽しさ」との結びつきが必然的に薄くなることになる。

そうになると、我々は「旅の楽しさを個人的経験」として充実させようとする社会的命題に向かう

場合、重要となるのは数少ない「失敗」を基礎に「旅の楽しさを創造する実践」に身を傾げざるを得なくなるのである。

我々の社会は、すでにこのことを学んでいるように見えないだろうか。そして、実際に社会は娯楽の修辭法に強く関心を示し始めているのである。先にあげたテレビの娯楽番組はその好例である。さらに、訪日外国人に含まれるバックパッカーと呼ばれるスノッブなインテリ旅行者たちは「失敗」ではないが、限界的な生活を「リアルティ」があると愉しむ傾向を見せており、この社会の動きと論理的には同調するものがある。「楽しさ」を軸に観光を見ると観光研究の視野は広がってくるのである。

（むらかみ かずお）



村上 和夫（むらかみ かずお）

立教大学観光学部教授・立教新座中学・高等学校 校長。立教大学大学院社会学部研究科応用社会学専攻修士課程修了。萩女子短期大学、横浜商科大学商学部、立教大学社会学部を経て現職。日本観光研究会会長・日本観光ホスピタリティ教育学会評議員・Asia Pacific Tourism Association 日本代表を務める。